

pattern B

虫葬

檜和田 拓努

とつさに私は自分の首に手を当てた。そこにはしつかりと自分の首があつた。おかしいことである。目の前にある死体に首がないからといって私自身も首がないということはありえないのに。

自分の首を流れる頸動脈の血の温かさを感じつつ、私は再びこの不自然な死体に目を落とした。首のない死体からは血が流れていなかった。あたかもこれは人形であるかのようにそれは私の居間に横たえられていた。

そして私は突然納得した。

はあ、さてはあの少年、首欲しさに死体から首を取り出したのはいいけど後に残った死体をどうしようもなくなつて俺の家に置いて行っちゃったな。

全く困つたものだ、ゆとりはこれだからとブツクサと文句を言いながら私は死体の胴体の部分を両手でよつこらせと持ち上げた。その拍子に私の足が死体の頭にあたつて、それは球のようにスッテンコロリと居間の椅子の下へと転がつていつてしまった。

まあ、後でいいか。

そう思つた私はまずはこの胴体进行处理することから始めた。

処理といつても簡単なものである。

私は両手でずつしりとした胴体を抱えながら足で窓を開いた。窓の外にはごんまりとした薄暗い庭がある。この家を購入した時に付いてきたものだ。とは言つてもガーデニングといった類にはさらさら興味のない私は荒れるに任せていたが。然るに今では茫茫とした雑草の生い茂るじめじめとした空き地と化していた。

いつちにつきさん、と勢いをつけて私は抱えていた胴体をこの庭に放り込んだ。

そして私は椅子の下に転がつていった頭を拾つてこれもまた両手でボールのように庭の中へと放り込んだ。ぽーんと弾みながら頭は茂みの中へ飛び込んで、そして見えなくなつた。

よし、これで片付いた。

私は一服するために懷から煙草とマッチを取り出した。ポツと火が付いたマッチ棒でタバコに点火した私は庭に

面した窓の前にある椅子にどつかりと腰を下ろして大きく息を吐いた。フワツとした薄煙があたり一面に立ち込め、そしてすぐに拡散して視界が回復していった。

その時、目の前の庭の片隅に一輪の花が咲いた。白い小さな水仙のような花だった。

その花を眺めながら私はもう一度息を大きく吐いた。また一つその隣に一輪の花が咲いた。この花も白くて小さな花だった。

さらにもう一度、大きく息を吐いた。まるで蒸気機関車のようなモウモウとした煙があたり一面に広がり、そしてまた収束した。

やはりまた一輪、前に咲いた花の隣に小さな白い花が咲いた。

こうして何度も煙草を吸っている間に目の前にある庭には真つ白な花が咲き乱れ、いつしか庭一面が花でうもれてしまった。それはまるで季節はずれの雪のようだった。

私は思い立って、庭に降りてみた。

どの花も皆、姉妹であるかのように一樣で、まるで工作機械でできた模造品のようだった。試しに傍らにある花を一本摘んでみた。プツツと小さな音がして切断された花の切り口からは、透明な液体が流れ出た。確かにこれは真正正銘の花であった。

ふと思いついてその流れ出る液体を指につけてペロリと舐めてみた。そのなんと甘美なこと！ それはこれまで生きてきた中で最も甘美な蜜であった。一口舐めるごとに頭の中がフワツと浮き立つようだった。この感覚もまた、これまでに経験したことのない魅惑的なものであった。

気が付けば、私は貪りつくように花の蜜を舐めていた。手にしていた花の蜜が絶えるとすぐさま近くにある別の花を引きちぎるようにして摘み取ると、すぐさま蜜を舐め始めた。それはあたかも甘い香りに惑わされた虫のようであった。

どれだけの時間が経ったのだろう。私はひたすら花の蜜を吸っていた。

ふと、地面に何かボールのようなものがあることに気が付いた。それは例の頭であつた。さきほど私が投げ入れたものだから別にここに転がっていることは不思議ではなかつた。ただ、少しだけ不調和を感じた。

はて、なんであろうか。

蜜を吸う口を休めずに頭を巡らせた。そしてあることに気付いた。その頭には首があつたのである。ただしその首は尋常な首ではなかつた。頭の下に生えた首は明らかに植物の根つこであつた。無数の根が絡まり、束ねられてひとつの人間の首のようになっていた。その首は時折ブルつと震えながらみしみしと音を立てて地中へ深く潜り込んでいた。

そして私は確信した。これは種であつたのだと。恐れおののいた私は口にベタついた蜜を付けたまま、ブウン、と羽音を立てて花でもれた庭から飛び去った。